

# 世界から刺激を 世界へ刺激を

## ～海外で学ぶということ

日本社会事業大学社会福祉学部

伊藤 理沙

村田 悠治、菊池 優理恵

原 夏実、菊池 崇志

杉山 智恵子、松岡 健太

## 企画構成

10:00 企画の説明

10:10 自己紹介兼アイスブレイク

10:20 テーマ選択、ディスカッション

11:30 まとめ、感想

## はじめに

「ソーシャルワーカーは多様な社会に目を向けるべきでないか」、「学部生レベルで海外の社会福祉に関心を持てる講義が少ないのではないか」との疑問提起からこの企画が始まった。同時に、本学留学生が単科大学という限られた環境にいる日本人の学生に対して、学術面、生活面の双方で多様性を与えてくれる存在になりうると考えた。そして、国籍や文化的背景の異なる学生同士の交流から今後まだ出会ったことのない価値観に触れ、視点を増やすことへの関心を深められる場を提供する企画を目指した。さらに、学生が「世界からの刺激」を得て将来の国際化社会での社会福祉実践に役立てられる要素を考察するきっかけとなることも本企画の目的に据えた。そのために、本学と他福祉系大学に在籍する留学生、および本学で社会福祉関連学問の講義、研究を行う教職員の方々にアンケートへの協力をお願いし、回答を得た。アンケート結果は集計し、企画当日に参考資料として配布した。

国際社会に向かう我々の知的好奇心は本企画の目的をどんどん広げていったが、あくまでも福祉系大学の学生の立場であることを重視して本企画は「海外で学ぶということ」に焦点を当てている。なお、本企画を支える背景として社会福祉士の倫理綱領(2005)内の倫理基準3とNASW Code of Ethics(2008)のEthical Standards6の一部を紹介した。

## 用意した議題

- ① 留学生の日本での生活(衣食住)について、不便なところやトラブルなど  
⇒ 1' 異文化内での葛藤と対処法
- ② 現在学んでいることのうち帰国後いかせそうなこと
- ③ 留学生がなぜ日本で学ぶことをえらんだのか
- ④ 留学生の祖国で今必要とされていること
- ⑤ サークル活動・部活動について
- ⑥ 留学生の語学レベル、学んだ場所
- ⑦ 今後、社会福祉を学んでみたい国、地域、特に何を学びたいか
- ⑧ 留学生が考える学生同士の交流、大学の役割として求めること
- ⑨ 自国の風習や文化の特性に気がついたこと  
⇒ 9' 取り入れたい文化
- ⑩ SNS等友人、家族との連絡手段の工夫
- ⑪ 各国の「ソーシャルワーカー」の位置づけ
- ⑫ 各国の「子ども」のとらえ方、子ども支援のあり方
- ⑬ 各国の「障がい者(身知精)」のとらえ方(モデル)、障がい者支援のあり方
- ⑭ 批判的思考/Critical Thinkingとは
- ⑮ 異文化への理解とは
- ⑯ 自己表現力とは
- ⑰ 異国での生活力
- ⑱ 留学前の準備、ためらい、周囲の反応と留学後の進路
- ⑲ 日本人学生にたりないこと
- ⑳ 社会福祉への志
- ㉑ 社会福祉士実習の実習時間について

## 当日の議論1 (福祉分野を学びたい国・地域)

今後社会福祉を学びたい国として挙げられたのは、イタリア・デンマーク・スウェーデン・韓国等である。

イタリアでは、トリエステの地域精神科医療の取り組みを実際に見てみたいとの話があった。トリエステでの取り組みに関しては、実際参加している日本人ボランティアもいること、日本から視察に行ってもうまく日本の現場に活かしているかは疑問がある、等の意見が出た。デンマークやスウェーデンに代表される北欧への関心も高く、特にスウェーデンの障がい者・高齢者制度運営の実態を知りたいとの話もあった。これに関して、北欧の社会保障等の制度はマルハナバチに例えられるとの話がでた。つまり、航空力学的には飛べないとされていたハチが実際には飛べるように、理論上無理があると思われていた北欧の制度が、実際に運用されているということである。説明がうまくできない以上、日本でそのまま行うことは難しい。

韓国では精神障がい領域において、クラブハウス方式の先進的な取り組みがなされており、注目されているとの話があった。さらに、具体的な国の話以外にも、民間の旅行会社による海外の社会福祉施設を巡るツアーがあるとの情報も共有された。

## 当日の議論2 (各国のソーシャルワーカー)

### <韓国>

- ・社会福祉士の資格が取りやすい、一方で社会の認知度や地位は低い。
- ・社会福祉士の資格は誰もが取れる資格なので、あまり重要とされていない分野である。
- ・あまり覚悟がないため、実際に現場に出て挫折や絶望する人が多い。

ナム(2002)は著書の中で「韓国では資格証制度が初めて規定されたのは1970年の社会福祉事業法制定時であった(p32)」とし、「1983年、社会福祉サービス供給システムの合理化のための措置の一環である、社会福祉事業法が全面改正

された。この時、資格証制度が導入され、今まで社会福祉従事者と呼ばれていた人達が社会福祉士という名称になったが、これは社会福祉という分野で従事するという一体感を持つ職業人としての社会福祉人材を創出する契機を作ることへとつながった(p15)」としている。さらにその後「1980年代を過ぎてから急速に増加した大学の社会福祉学科の新設は、韓国福祉制度の改革のための人的資源を形成する重要な土台となる(p15)」と述べている。

### <中国>

- ・社会福祉工作人員という名称の国家制度がある。
- ・福祉施設は民間任せで、高額な入居費が払えないと施設を出されてしまう。
- ・現在は児童中心の福祉制度が充実しており、虐待には取締りが厳しい。

### <その他>

- ・スウェーデン・アメリカではワーカーへのスーパーヴィジョン等フォローが充実している。
- ・北欧の税金の高さは高齢者にとって良い国であるが、若者は母国から離れてしまう。

「福祉」という用語には専門性があり、世界のソーシャルワークの位置づけや、制度・政策がそれぞれ違っていても「福祉」というくくりは同じであるとのこと。しかし、資格制度としての社会福祉士の位置づけは、日本と同じアジア圏内の中国・韓国では比較的低かった。参加者からの情報が少ないことを懸念して「変わるヨーロッパのソーシャルワーク教育(2014、岩崎)」を用意したが、これは簡単な紹介にとどめた。インターネット上では、このような情報も得られることをお伝え出来たのならよかった。

また、他国と日本とのソーシャルワーカーの現状比較は日本の学生に刺激を与えてくれた。本企画に集まった学生以外の方からも「日本の福祉制度は整っている」という意見もあり、外国からの留学生が資格制度としては社会福祉士の位置づけが比較的高い、日本で社会福祉を学びたいと思っ

て来日されたのではないかと考えられる。

### 当日の議論3 (批判的思考 /Critical thinking)

まず、Kirst-Ashman と Hull (2009) がジェネラリスト・プラクティスとは何か、という説明の中に「クリティカル・シンキングスキルの使用(p27)」を含めている点を取り上げた。この中でクリティカル・シンキングは (a) 何が正しいとされているか、何が正しいように見えるか吟味して、(b) 問題提起に対して創造的に意見や結論を表現することであると述べられている。そして、その思考の方法として3つのA(Ask:質問をする、Assess:既成事実と問題点を査定する、Assert:結論を主張する)がアプローチの一例としてあげられている。一方 Kirst-Ashman らは、クリティカル・シンキングを進める過程で事実の誤謬があってはならないとしている。実践者として、知名度、目新しさ、経験等に踊らされた思考による判断に注意を呼びかけていることも本企画参加者にお伝えした。

議論の中では「critical」が様々な場面で使われているということが話の中心となった。例えば critical pass (クリティカル・パス)である。建築では工事を工期内に完成するにあたってまったく時間の余裕がない過程のことを示し、医療では治療の段階および最終的に患者が目指す最適な状態に向け医療の介入内容をスケジュール表にしたものを示す。また、批判理論としての critical theory も挙げられた。さらに、「critical」の訳語について話題が上がった。「批判的」と訳されるが、本来中立的で客観的判断であった言葉が、現在では否定的な意味で捉えられることが多く非難の意味になってしまうことがある。critical thinking の批判的というのはもっと異なる訳語が必要なのではないかという意見があった。

では批判的思考の「批判」とは何かという話になったとき、支援の対象に加えてワーカー自身を見つめることなのではないかという意見が出た。また、現役のソーシャルワーカーの方からの考えとして 観察者である自分の分析、対象を良い意味で疑い、批評して判断をすること、得意なアプローチに偏らないように自分の偏った思考に対し

での批判などが挙げられた。

講義概要上のアカデミック・プランニングにおいても「クリティカル・シンキング&ライティング」の用語が見られ大学教育に必要なこと捉えられているように見受けられる。しかし、実際は具体的な記述はほとんど無くアカデミック・アドバイザーによってその指導内容はまちまちであるようだ。ソーシャルワーク研究および実践にとって「クリティカル・シンキング」の役割を明確にすることで、我々の学びもより深まると考えられる。

### 当日の議論4 (サークル活動・部活動)

日本のサークルや部活動は海外のそれと比べてどうなのかということについて議論をした。その結果、海外ではクラブ活動がそこまで盛んではないということが判明した。また、日本では学校単位のクラブ活動やサークル活動を通して生徒・学生間の仲を深めようという発想があるが、それは海外にはほとんど見られない文化であり日本独自のものであるということも分かった。

今回のこのテーマについて議論することによって、日本社会事業大学に留学している学生から、我々日本人学生が普段生活しているだけでは知ることのできない多くの情報や意見を聞くことができた。例としては、九州大学では留学生向けの講義に日本人学生が参加し、一緒に日本文化等の授業を受けることで単位が認められるものがある。これは、学校側が定めた留学生用のカリキュラムに従うことによって日本人学生との交流を図ることが出来づらい環境に身を置いている本学の留学生にはなかなか経験できないことである。文化的背景を異にする学生間の関係性を築くきっかけのある講義には、多様性を学ぶ上でメリットが感じられる。

日本に留学してきている海外からの学生から多く上がってきた声として、「日本人留学生ともっと多く触れ合う機会が欲しい」ということも挙げられていた。これは、留学生がもっと日本人学生と交流を深めたいという心の表れである。留学生は、同じように海外から留学してきた学生と一緒に

にやすくなり固まってしまう傾向にあるが、実際は日本人学生とも話したいと考えているのだ。しかし、日本語の講義内容を理解するための日々の予習・復習や生活費を稼ぐためのアルバイト等により日本人学生との接触の機会が少ないことや、留学生側から日本人学生に話しかけづらいといった理由からあまり日本人学生との交流が図れていないといった現状があることも把握することができた。

これまで述べてきたとおり、たくさんの意見を留学生から聞くことができた。本企画におけるサークル活動・部活動についてのテーマは、留学生たちの考えや要望を聞くことができるよい機会であり、これからの日本人学生と海外からの留学生との関係性に一石を投じるものであったという印象を受けた。

#### 参加者からの感想（原文）

◆日本の福祉は整っていると言う人がとても多かった。私の祖母は外国人差別の心労で昨年亡くなりました。自国の人が助かるのだけが福祉ではなく、他の国の人の人権も考えられる日本であってほしい、と今日改めて思いました。（援助学科1年）

◆グループワークのアイスブレイクとして自己紹介はよかったが、最後みんなで感想を一人一分でもいいから出しあい、グループを共有する時間があればもっと「参加してよかった」と思えたかもしれない。多くの話題にこうとして一つの議題の深まりがやや少なかったのが残念です。これもcritical thinking？

◆海外では枠はいらないと思います…と…。海外にいた身として…。

◆時間が短いと思います。全員が発表するには、9時から始めたほうがよいと思います。全ぜん話さない人もいるし、時間の平等の共有が必要です。平等な時間で話をする。消化不良な面がありました。

◆すばらしい企画でした。SWには本当に必要な内容ばかりで、とても良かったです。カリキュラ

ムの中にもバンバンこのような取り組みをとり入れて欲しいです。

◆色々な社会福祉の話がきけて、楽しかったです。日本の方々の考え方など、とても勉強になりました！

◆留学生の方から出た、留学生だけ向けの授業内容への要望や、サークル活動への参加のし辛さみたいな意見は、早急に検討する場を設けて改善につながる意見書、要望書のレベルを高めて実現する方向性を示すべきと考えます。discussionの専門的レベルは置いといて、内容、テーマの取り方は素晴らしいと思いました。レベル・アップしながら継続していくべきセッションだと思います。

◆本日のプログラムはとても良かったと思います。情報の共有ができて、話し合うことによって参考になった部分も多くありました。今後ともこのような交流の場を多く設けるといいと思います。異文化間の交流、異文化の理解はとても重要だと思います。異文化共生社会を目指しましょう。（計画学科4年）

◆久しぶりに学生気分を味わいました。初心に戻って楽しさと共に、気がひきまりました。海外のソーシャルワークを学びに留学をしたいと思っていた、若い頃の夢が思い出されました。社事大の学生さん、がんばって下さい。

#### おわりに

国際化社会と言われてはいるが、日本で暮らす大学生として専門分野を学んでいる者にとって、海外の今、特に専門分野に関して知ることができる機会というのは少ない。今回の企画を終えて、留学生、現場のソーシャルワーカー、現場経験のある編入生、学部生、院生等の様々な立場の人が揃い、一度に各国の社会福祉やソーシャルワークの技術について色々な意見が直接聴け、話せる機会はなかなか無いものであったと改めて感じている。実際の声というのは本に書いてある文章よりもよほど重要であり現実をうつしていると思う。ディスカッションを通して、我々が知っている他国のソーシャルワークの知識がいかに偏っていて

一方通行の視点であるかを思い知らされた。他者の意見を聴くことで、今学んでいることがみえてくる場面もあった。他にも、価値観についての悩みが批判的思考についての話によって少し開けた気がした、今後の自分の社会福祉への方向性により近づいたように感じた、といった肯定的な意見も共有できた。

とても充実した時間を過ごせたとともに貴重な経験をすることができたとの喜びの一方で、反省点もいくつかあげられた。参加者全員が円で議論を行ったことで皆の意見を聴くことはできたが、発言が伺えなかった人もいたのでグループの方が良かったかもしれない、というのがひとつ。企画の進行やディスカッション形式等は探り探りだったために、スムーズにいかない場面がみられたことがひとつ。時間に追われる形で、参加者の感情をしっかりと受け止めて締めることができなかったことにも申し訳なく思っている。

他にも反省点があげられるが、このような企画を是非継続的にやってほしいという声もある。よって、留学生を含めた学部生が多様性の理解等を目的とした意見交換する場（学会企画・合同講義・交流会等）の必要性を感じる。参加してくださった方々も様々な刺激を得る事が出来た場であったのではないかと考えており、反省点をふまえ今後も何かしらの形で実施を考えたい。

最後になりましたが、企画を進めるにあたり校友室の方々を始め多くの方のご協力をいただきました。そして、アンケートに回答してくださった先生方、留学生の皆様には感謝の念にたえません。本当にありがとうございました。

## 参照

岩崎浩三（2014 参照）「変わるヨーロッパのソーシャルワーク教育」日本ソーシャルワーカー協会ホームページ

ナムチャンソプ（2002）「韓国福祉制度の展開過程とその性格」『韓国の社会福祉制度（金永子編訳）』、韓国社会科学研究所社会福祉研究室、新幹社、p9-35（原本出版 2000）

日本社会福祉士会（2005）倫理綱領  
Kirst-Ashman, k.k., & Hull, G.H. Jr., (2009).  
General practice with organizations and communities (4th ed.). Canada: Brooks/Cole  
Cengage Learning.  
National Association of Social Workers, (2008)  
Code of Ethics.